

Title	本巻第四・五號掲載：「月氏のバクトリア遷移に関する地理的年代的考證」補遺
Author(s)	内田, 吟風
Citation	東洋史研究 (1938), 3(6): 521-525
Issue Date	1938-09-28
URL	http://dx.doi.org/10.14989/147091
Right	
Type	Journal Article
Textversion	publisher

「月氏のバクトリア遷移に關する地理的年代的考證」補遺

内 田 吟 風

〔三〇六頁註⑤〕 魏晉以後の祁連山

漢代の祁連山は本文考證の如く今の天山東部カルルクタグなるに拘はらず、是が今の甘肅省西北部の祁連山脈中の祁連山と考へられ易いのは、酒泉と張掖との界上に亘る山（つまり今の祁連山）を祁連山と稱するやうになつたのが相當に古いからである。

北涼段龜龍の涼記（說鄯所引）には「祁連山、張掖酒泉二界上。東西二百里、南北百餘里。山中冬溫夏涼、宜牧牛酪濃好」と見え、又西涼劉昫の燉煌實錄（太平廣記所引）に「（涼文王張駿）得其（侯子瑜）曾孫亮、爲祁連令矣」とある祁連は何れも張掖酒泉間に存したものであつて、少くとも五胡十六國時代には既に祁連山とは張掖酒泉間の山を指すことゝなつてゐたのが明にわかる。

これは漢以後の匈奴族移動につれて祁連山の名も移動したからと考へられる。（西河舊事に「祁連一名天山、亦曰白山也」「白山冬夏有雪、故曰白山、匈奴謂之天山、過之皆下馬拜焉、去蒲類海百里之內」とある如く祁連山は恐らく匈奴族祭天の聖地であつたから）魏晉以後再び匈奴族が支那邊疆に入居するに及び、遂に祁連も甘肅に入り、唐代に至りては最早祁連山と謂へば張掖酒泉の祁連ときまつて了つたものと考へられる（「括地志元和郡縣志等々參照」。その祁連と云へば甘肅の祁連と定つてゐた唐代に於て顏師古が慙々漢代の祁連山は天山であると注意したことは看却出來ないことの一である。又其以前の北魏頃に出來たと思はれる西河舊事に「祁連山在張掖酒泉二界上……祁連一名天山亦曰白山也」とあるのは、當時未だ古い祁連山と

新しい祁連山との概念が一般には區別されてゐなかつたことを物語るものとして注意せねばならぬ。

是等の推察は兎も角、要するに魏晉以後、少くとも五胡十六國以後に於いては祁連山とは甘肅の、大體今の祁連であることに疑は無い。だから漢代の祁連山は漢書の紀傳志に之を天山(カルクタグ)となす諸記事存する以上本文考證の通り之を認めねばならぬ(従つて月氏の故地敦煌祁連間とは敦煌天山東部間つまり新疆省東部と目すべきことに關しては本文(頁二〇六—二〇九)に詳説の通りである)が、さればとて魏晉以後の祁連山をも亦カルクタグと謂つてはならないこと勿論である。漢代の祁連山は天山カルクタグ、魏晉以後の祁連山は今の祁連山脈(リヒトホーフン山脈)中の祁連山又は其附近の一山なのであつて、時代による區別を注意せねばならぬ。

×

〔四〇六頁註⑥〕 休循國の位置

Chavannes, *Les pays d'occident d'après le Weiio* (Toung-pao Ser. II. Bd. VI. S. 555. Ann. 4) の文面の實際は、休循を Karategin とせず、逆に Irkesch-

tan とし、捐毒を以て Karategin となしてゐるのであるが、之が氏の思ひ違ひによる入れ誤りたるは、既に O. Franke (deGroot, *Die Westlande Chinas in vordhr. Zeit*, S. 113. Ann. 1.) や、白鳥博士(西域史上の新研究三)の指摘する處なれば、本文註には單に Chavannes 氏説を以て休循=Karategin と表はして置いたに過ぎぬ。又休循を以て Gulcha に比する考の存するも、其が妥當性無きことは白鳥博士(同上)及び桑原博士(藤田君の貴山城及び監氏城考を讀む)等の論ぜし處であるから、之亦觸れなかつたのである。

四〇三頁第一行目「コージエンドはアライよりも將又イルケシユタムよりも云々」のアライの下に Disipuk の八字を補入。アライ高原の一邑 Disipuk は休循國の首府であつたと考へられてゐるものである。(白鳥博士同上論文參照)

×

〔四〇五頁〕 貳師將軍の宛都攻撃

貳師將軍李廣利が攻撃せんとし、又攻撃したる大宛の城が大宛の王都であつたことは既に白鳥博士、藤田(豊)博士等も認められし處であつて、(1)史記大宛傳に

李廣利大初元年の第一回大宛征伐失敗を記して「(貳師將軍)軍比至郁成、至者不過數千、皆饑罷。攻郁成。郁成大破之、所殺傷甚衆。貳師將軍與哆・始成等計、至郁成、尙不能舉。況至其王都乎。引兵而還」とあり(2)廣利が第二回征討は宛城を涸渴せしめて遂に成功したが、同上書は其を「宛王城中無井、皆汲城外流水。於是乃遣水工從其城下水空云々」と明記し、(3)又遂に其宛城降伏の狀を記して「其外城壞。……宛大恐、走入中城。……(宛貴人)共殺其王毋寡。持其頭、遣貴人、使貳師約曰云々……。(貳師)立宛貴人之故待遇漢使善者名昧蔡、以爲宛王、與盟而罷兵。終不得入中城、乃罷而引歸」とある等よりして推知し得る譯である。

然し乍らこの宛の王城が所謂貳師城であつたと云ふ證據皆無なること、又假りに百歩を譲つて廣利の大宛征伐當時頃迄の、即ち史記が記してゐる處の宛都が貳師城と稱せるものであつたとしても、之も亦結局カサン附近に求めざるを得ないことは本文に説いた通りである。後者は前に藤田博士(「大宛の貴山城と月氏の王庭」東洋學報六)が、郁成城との關係其他より貳師を以て *bedgi* 地方の音寫と見、貳師城は矢張り *Kasan*

なるべきことを主張せられたると結果に於て一致するものである。然し余は同博士の比定方法の當否に關して、特に其重要な一理由郁成 = *Aksikat* 説は可能的なる推定ではあるけれども確證あるものではなく、殊に郁成が必ずしも宛都より二百里(從つて宛都比定の因子と見得る)か否かを甚だ疑ふものであるから(「四一四頁註③」)猶若干の疑を有するものであり、余は寧ろ單に假令最初(所謂史記時代)宛都は貳師城と稱するものであつたとしても、宛都比定條件中の(史記記載に出發せる)第三・第四・第五條件を否定せざる限り、矢張り結局之をカサン附近に求むる外なしと謂はねばならぬことを主張したのである(「四〇六頁・四〇九頁註⑥」)。

*稍後世の文獻なるが、陳壽三國志三〇に「漢孝武雖外事四夷、東平兩越朝鮮、西討貳師・大宛、開邛笮夜郎之道、然皆在荒服之外」とあるは、貳師が大宛の王都に非ずして却つて其屬邑(大宛の屬邑七十あり)であつたこと示してゐると目し得るものである。

X

〔四二〇頁〕大月氏王の行營地

大月氏が大夏を征服した後も、其地は大夏元來の小土王等の分治するに委せられたこと、而して其の小土

王とは休密翎侯・婁靡翎侯・貴霜翎侯・胖頓翎侯・高附翎侯等の五翎侯にして各々和墨城・婁靡城・護藻城・薄茅城・高附城に治したこと、従つて史記に大夏の總首都の如く記されてゐる藍市城とは大月氏が大夏を統治する爲に官吏を駐屯せしめし城市と見なければならぬことは既述の通りであるが、本文にこれを以て大月氏の離宮或は其總督府所在地であらうと表現したのは少しく當を失して居たと思ふ。史記大宛傳に張騫が初めて康居より大月氏に傳致せられたる狀況を記して、「大月氏王已爲胡所殺、立其太子爲王。既臣大夏而居。地肥饒、少寇、志安樂、又自以遠漢、殊無報胡之心。窳從月氏至大夏。竟不能得月氏要領」とあるは、文意より見て彼が、嬌北（Oxus 河北）にして且つ大宛の都貴山城（Kasam）の西南約七百漢里（一漢里ハ約四百米）なる月氏王庭に到着せる折、月氏王は大夏に行營して居たるが爲に、更に大夏に赴き其處にて匈奴共伐の計を議したが遂に月氏の要領を得ずして歸つたことゝ見ねばならぬ。古代、特に遊牧の國の王が（月氏は當時遊牧生活を營んでゐた）主として季候又其につれて起る經濟的政治的の事由より、王庭以外に一定の行營地を有して、

時々移動することが多かつたことは周知の事である。

今の Balk と思はれる藍市城が元來首都無き筈の大夏の首都であつたのは、つまり其が大月氏王の行營地であり大夏諸小王統御の中心地であると共に、史記に「有市販賈諸物」と態々附記してある如く、經濟の中心地でもあつたからと考へられる。

×

〔四三頁〕希臘系バクトリア王國侵奪の四族

Strabo (XI. 511) は、希臘系バクトリア王國の侵奪者に關して、Saka 族と Sogdian 族とを對分するヤクザルテス河の對岸サカの地より出で來つた Astoi, Pasiakai, Tocharoi, Sakaraukoi がソグデアアナとバクトリアを奪取したと記してゐるが更に又別にストラポーは Saka 及び Massagetae を以つ Skythai と區別してゐる。然るに本文に、Strabon 地理書に見ゆるバクトリア侵奪のスキタイ四族云々と記したのは、ストラボンの記述のみによりても之等サカの地より來れる四族が果して全部サカ族であつたか否か明であるとは云ひ難く、且 Diodorus がサカをも亦スキタイに含まるゝものと記してゐるのみでなく、Trogus Pom-

peius (prol. 41) に此の侵奪事件を「Saraucæ 及び Asiani なるスキタイ諸族がソグデイナとバクトリアを占有した」と記してゐる以上 (v. Gutschmid, Geschichte Irans, S. 58; Marquart, Eransahr, S. 205 参照) 寧ろスキタイなる普通の綜合名稱を使用するを可と考へたからである。嚴密に申せば此の Asioi, Pasianoi, Tocharoi, Sacaraukoi を以て四族云々と謂ひ得るや否やも問題である。何故ならば Trogus Pompeius (prol. 42) のスキタイ史附記には Tocharoi の王は Asiani であり、Sacaraukoi を滅したといふ意味のことが記されてゐる。つまり Asiani は支配部族乃至王朝名じ、Tocharoi は民衆名じであると考へ (Tomasek, Realencyclopadie des klass. Altertumswiss.)、又之を以てバクトリア侵入の蠻族は事實上 Tocharoi (= Asioi). Pasiakai. Sacaraukoi の三族であると考へ (Lassen, Indische Alterthumskunde Bd. II.)、又或 Pasianoi 及び Asioi とは同一族であると見ることも (J. Marquart, Eransahr; O. Franke, Beiträge zur Kenntnis der

Türkvolker und Skythen Zentralasiens.) も出来るからである。然し之等は何れも確證を以て證明せられたものとは云ひ難く又反對説も尠くない。従つて希臘系バクトリアの侵奪者を以て便宜上 Asioi 等四族云々と記述することは毫も差支へないと考へる。

これら四族が同時に、或は前後してか、或又如何なる本地・經路よりバクトリアに入れるかと云ふ如きことに關しても既に藤田(豊)博士(月氏の故地とその西移の年代)や、多くの歐人史家によつて、主として支那史料の補用により研究が行はれてゐるが、[A. Hermann, "Saraucæ", "Tocharoi", Real-Encyclopädie der classischen Altertumswissenschaft 參看]、然し此の事は結局本文に於て問題を後日に譲れる處の月氏を以て此の四族中に求むることと同じことであつて、猶甚しく詳考を要するものに外ならぬ。

これ等は何れも將來稿を改めて詳細に考究して見たらと思ふ。(了)